

令和 2 年 6 月 5 日現在

機関番号：32634

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02821

研究課題名(和文) イングランド北部英語の社会音声学的現状調査

研究課題名(英文) Sociophonetic research on current accents of English in the North of England

研究代表者

三浦 弘 (MIURA, Hiroshi)

専修大学・文学部・教授

研究者番号：00239188

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：イングランド北部の数地点とマン島において、英語の各地方方言発音を現地に於て録音し、音声特徴の現状を社会音声学的な手法で記録し分析した。社会音声学的な手法というのは、地域的な相違のみならず、被験者の社会的階級や年齢などを考慮して方言発音の変異を分類し、音響的な音声分析の結果に基づいて音韻体系を考察するものである。調査はマージサイド州リバプールとマン島(平成29年度)、ランカシャー州プレストンとヨークシャー州ブラッドフォード(平成30年度)、及びランカシャー州ランカスター(令和元年度)にて実施した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

イギリスにおける本格的な英語方言調査は1950年代からの「英語方言調査」(the Survey of English Dialects)に始まり、多数の知見が集められているが、言語は常に変化しているので、方言調査に終わりはない。本研究課題では地域差のみならず、被験者の社会的階級や年齢を分類して音声を収録して、音響的な音声分析に基づいてデータを考察し、定説とみなされている知見にも例外があり、地域を超えた下層階級方言に共通して見られる音声特徴、及び新しい音韻体系の変化傾向を示すことができた。

研究成果の概要(英文)：From original recordings made on field trips to the North of England and the Isle of Man, the present-day distribution of the sounds of each local accent of English was analysed socio-phonetically. The recordings were made in Liverpool and the Isle of Man in 2017, in Preston (Lancashire) and Bradford (Yorkshire) in 2018, and in Lancaster in 2019. There were several new findings observed such as vowel features. For example, the merger of the lexical sets NURSE and SQUARE is observed in Preston as well as in Liverpool. The vowel of Preston and mild Liverpool accents is mainly 'central mid unrounded', although that of broad Liverpool is 'front open-mid unrounded'. The vowel of THOUGHT-NORTH-FORCE of Liverpool, the Isle of Man and Preston is 'back close-mid rounded', while that of Bradford 'back open-mid rounded'.

研究分野：英語音声学

キーワード：音声・音韻 英語の多様性 社会音声学 発音変種 音声分析 イングランド北部英語 マン島

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 英国における本格的な方言研究は 1950 年代に遡るが、音声については調査員の聴覚印象に基づく、発音記号による書き取り調査が長年続けられてきた。それが 21 世紀になって、社会言語学と音響音声学を融合させた「社会音声学」(sociophonetics) という一層科学的な手法が方言研究に用いられるようになった。研究代表者は平成 23 年度から 28 年度にいただいた 2 つの科研費(課題番号: JSPS JP23520593、及び JP26370574)による研究を通じて、ケルト系諸語の影響を受けていると思われる、スコットランド、ウェールズ、アイルランド、及びコーンウォール地方の発音変種(方言発音)を社会音声学的に研究した。

(2) 本研究課題はリバプール方言に着目したところから着想を得た。リバプールはイングランド北部に位置していて、この地域では 5 世紀にアングロサクソン人が侵入して以来、ケルト系の言語は使用されていない。しかし、19 世紀半ばにアイルランドでジャガイモ飢饉が起こり、対岸のアイルランドから膨大な数の移民を受け入れ、リバプール方言は「スカウス」(Scouse) と呼ばれる独特な(アイルランド語の影響を受けた)イングランド北部方言となった。現在ではリバプール・マン島間のフェリーが毎日就航しており、19 世紀まで「マン島語」(Manx) というケルト系言語が使用されていた孤立した島の英語が、スカウス(アイルランド訛りのイングランド北部方言)の影響で変わりつつあるという噂を耳にした。

## 2. 研究の目的

(1) マン島語の影響が残るマン島英語方言における近年のリバプール方言の影響を調査すること、つまり、2 つのケルト系言語の影響がどのような結果をもたらしているかを研究することが最初の関心事であった。また、リバプールはイングランド北部にあるので、リバプール英語は元々イングランド北部英語であった。標準英語となっているイングランド南東部の英語とは異なる発達をしているために、イングランド北部英語の現状を社会音声学的に調査することも当初からの目的であった。

(2) 平成 29 年度にリバプールとマン島での音声収録調査を実施してみると、下記の 4 つの点からのように認識が新たになった。リバプールからのフェリーが発着するマン島の主都ダグラスには確かにリバプール出身者も多かったが、マン島のダグラス方言にはマン島語の影響も残り、発音にリバプール方言の影響を見つけることは難しかった。リバプール方言のマン島方言への影響は発音ではなく、語彙に見られるだけであった。例えば、イングランド北部英語で「サンドイッチ」のことを *buttie* (バターを付けたパン) と言うが、ダグラスの若者が最近 *buttie* を使うようになった、という程度のものであった。マン島語は最後の母語話者と言われている Ned Maddrell 氏が 1974 年に他界して以来死語となった、という定説も正確ではなかった。マン島語を自由に話せる住民が多かった。英国の他のケルト系地域(ウェールズ、コーンウォール、スコットランド高地地方)に伝わった英語がイングランド南東部英語であったのに対して、マン島に伝わった英語はイングランド北部英語であった。マン島は日本の淡路島とほぼ同じ面積であるが、マン島語の方言は教会区(parish)ごとに異なっており、マン島英語の発音にもその影響が見られた。以上 4 つの現地での情報をもとにして、マン島とリバプールでの調査目的を修正した。

マン島では被験者を高齢者に絞り、マン島英語発音の地域差とマン島語音声の影響を調査した。リバプールでは社会的階層の違いによるリバプール方言の差異、つまり現在の「訛りの強い」(broad)リバプール方言と「訛りの軽い」(mild)リバプール方言を比較することにした。

(3) 上記のように初年度の現地調査中に研究目的の軌道を修正したために、続く 2 年度の目的をイングランド北部内ではあるが、ランカシャー州とヨークシャー州の方言発音の調査に絞ることとした。本課題研究の開始前には言語変化が速いと言われている大きな工業都市(マンチェスター)での調査を予定していたが、マン島へ伝わった英語がランカシャー州の英語であると思われる、リバプールも昔の行政地区ではランカシャーに属していたため、ランカシャー州に注目した。そして東隣のヨークシャー州の方言をイングランド北部英語に共通する要素を考察するための手がかりとして調査した。

## 3. 研究の方法

### (1) 音声収録方法

キャリアセンテンスと語彙リスト

被験者に語彙リストを提示して、各語をキャリアセンテンス(Say \_\_\_\_\_, please.)に入れて、2 回ずつ音読してもらった。分析には 2 回目の音声を使用した。語彙リストには英語方言調査の「標準語彙セット」(the standard lexical sets, Wells 1982 & Foulkes & Docherty 1999) の 73 語に加えて、事前の文献研究から地域ごとに独自に選択した約 80 語を含めた。

### 録音機器

収録には、ポータブルレコーダーとプラグイン・マイクロフォンを使用した。メイン・レコーダーは平成 29 年度のマン島とリバプールでは Roland R-26 を、平成 30 年度と令和元年度のプ

レストンとブラッドフォード、及びランカスターでは SONY PCM-D100 を使用した。プラグイン・マイクはコンデンサー・マイクロフォンである SONY ECM-MS957（周波数特性 50-18,000 Hz）バックアップ・レコーダーは TASCAM DR-08 である。

#### 被験者

マン島の被験者はマックス博物館の学芸員の紹介を受けて、電話で個別に訪問の約束を取り付けて被験者の自宅へ伺って音声収録した。リバプールではアラートン図書館、パークランズ図書館、ノリス・グリーン図書館で部屋を借りて、地元の来館者に協力していただいた。プレストンではハリス図書館とブラックバーン中央図書館で収録した。ブラッドフォードではボーリング場（Go Bowling）の従業員に被験者になっていただいた。ランカスターではフレンドシップ・センターとフェアフィールド協会という 2 つの慈善団体から多数の高齢者を紹介していただいた。

### 4. 研究成果

#### (1) NURSE 母音と SQUARE 母音の融合

リバプール及びその周辺地域の訛りの強い方言には「NURSE 母音と SQUARE 母音の融合」(the NURSE-SQUARE Merger)が見られる。特にそれはリバプール方言の特徴として有名である (Wells 1982: 361)。まず、収録音声の中から NURSE 母音は nurse, turn, perch を、SQUARE 母音は square, scare, wear の母音を Praat version 6.1.02 (Boersma & Weenink 2019) で分析し、各母音の F1 (第 1 フォルマント) と F2 (第 2 フォルマント) の周波数をプロットした散布図 (F1-F2 ダイアグラム) を作成した。最初にリバプールと比較するのは同年度に共通の語彙リストで調査したマン島である。マン島には 19 世紀以降ランカシャーのヒーシャム (Heysham) とリバプールから定期船が就航し、ランカシャーの英語が伝わったようである。

マン島の被験者は北部と南部の 4 名ずつに分け (図 1、図 2)、リバプールは訛りが強い 3 名と訛りが軽い 5 名の被験者に分けて (図 3、図 4) 比較する。図 1 と図 2 が示すように、マン島では NURSE 母音と SQUARE 母音の融合は生じていない。しかし、SQUARE 母音が平滑化 (smoothing) して、単一母音になっている話者は北部にも南部にもいる。マン島では南部の方にマン島語の影響が強く残っている (子音の発音等に現れる) が、図からも北部の方が SQUARE 母音の平滑化が進んでいることがわかる。また、SQUARE 母音を二重母音で発音している話者は、南部の方が前舌化していて、わたり (glide) も大きくなっている。

図 3 と図 4 から現在のリバプールでは訛りの強い話者のみならず、訛りの軽い話者にも、NURSE 母音と SQUARE 母音の融合が完全になされていることがわかる。図 3 の訛りの強い話者は 3 人全員が DRESS 母音を伸ばしたような母音を用いている。図 4 の訛りの軽いグループでは話者によって母音の音価がやや異なり、BBC 発音の NURSE 母音、あるいは訛りの強い話者の前舌化した母音で融合している。「NURSE 母音の融合」とは言っても、労働者階級の訛りの強い発音の音価は BBC 発音の nurse には用いられない前舌半広母音に収斂されていることは注目に値する。

図 1 NURSE 母音と SQUARE 母音の F1-F2 ダイアグラム 1\_\_マン島北部

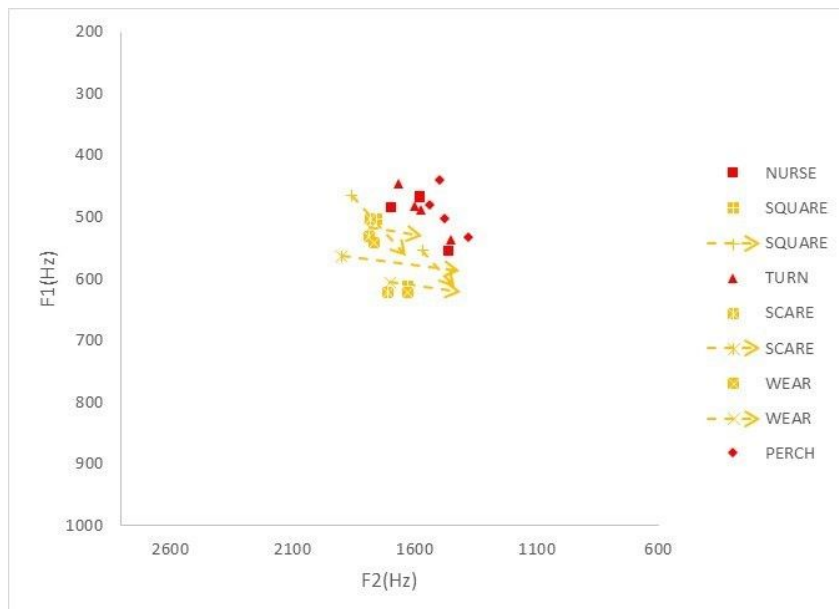


図 2 NURSE 母音と SQUARE 母音の F1-F2 ダイアグラム 2\_\_マン島南部

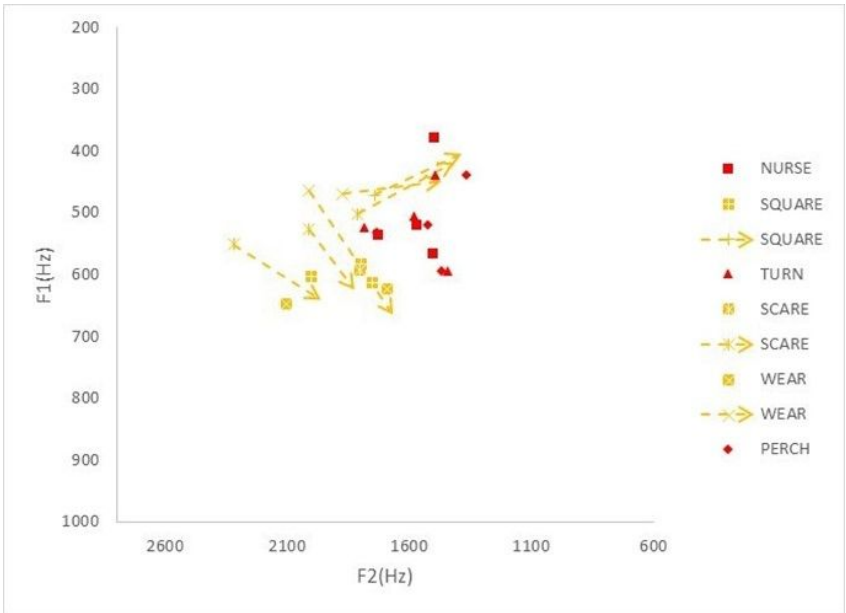


図 3 NURSE 母音と SQUARE 母音の F1-F2 ダイアグラム 3\_訛りの強いリバプール

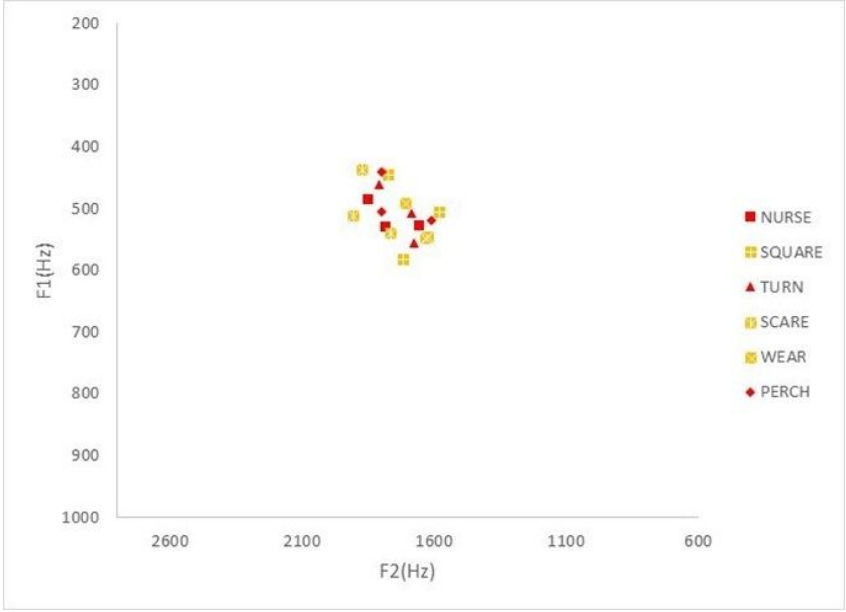
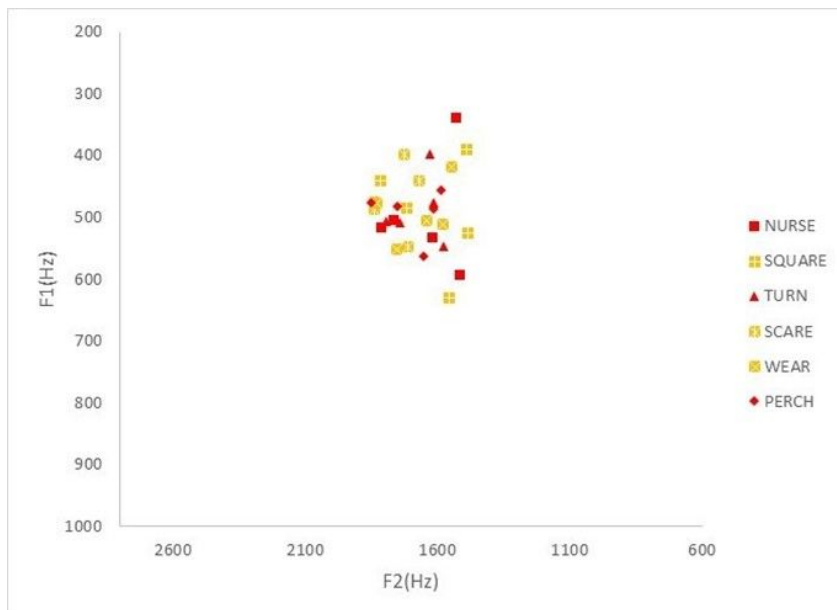


図 4 NURSE 母音と SQUARE 母音の F1-F2 ダイアグラム 4\_訛りの軽いリバプール



### (2) THOUGHT 母音と NORTH 母音と FORCE 母音の融合

Wells (1982: 373) は、リバプールにおいても CURE 母音が当時の RP (20 世紀の容認発音) 同様の母音に置き換わりつつあることと、FORCE 母音の二重母音が THOUGHT 母音に融合することが広まっていると記述している。しかし、本課題研究の調査では、リバプールでは CURE 母音と THOUGHT 母音と NORTH 母音と FORCE 母音の 4 母音が円唇半狭後舌母音で完全に融合していた。その母音は上記の指摘よりも狭い母音であった。

現在の BBC 発音でこれらの 4 母音が融合しているのは、「第 1 次 FORCE 母音の融合」(the First FORCE Merger) と呼ばれる変化、つまり FORCE 母音が THOUGHT 母音と NORTH 母音と融合して、さらに「第 2 次 FORCE 母音の融合」(the Second FORCE Merger) と呼ばれる CURE 母音の一部の語群がその母音に合流したためである (Wells 1982: 287)。イギリスには第 1 次 FORCE 母音の融合さえ生じていない地域方言が多い。筆者の関心は融合した音価がリバプールでは一層狭い母音であるということである。BBC 発音でも THOUGHT 母音が狭母音化する傾向にあるようなので (Lindsey 2019: 146) 狭母音化は現在の流行なのかもしれない。

リバプールでは円唇後舌狭母音の調音位置でほぼ全員の母音が融合していた。訛りの強い被験者一人の north の母音が F1: 660Hz, F2: 1117Hz とリバプールのまとまっている母音領域からやや離れている。この被験者は north では非円唇母音として口の開きが大きくなっている。この発音はリバプールでは例外的であるが、ブラッドフォードでは標準的である。

マン島北部の発音では、一人の被験者が more の母音にはっきりシュワーを発音しているが、それ以外のすべての母音はリバプール同様に半狭後舌母音で融合している。マン島南部では、被験者一人の more がわたりの短い二重母音になっていること、および 3 人の被験者の horses が非円唇母音で発音されていることが違反しているが、その他の母音はリバプール同様に半狭後舌母音で融合している。

プレストンではまとまりのある母音領域はやはり半狭後舌母音の周波数帯である。ブラッドフォードでも THOUGHT 母音と NORTH 母音と FORCE 母音が融合していた。しかし、音価はリバプールとは異なり、半広後舌母音であった。

### (3) その他

上記のほかに「NEAR 母音と CURE 母音の音素変異」「単一母音としての SQUARE 母音と CURE 母音」「ランカスターにおける基層方言とイングランド北部に共通する下層階級発音」等の考察を行った。

#### < 引用文献 >

- Boersma, P. & Weenink, D. (2019). Praat: doing phonetics by computer [Computer program]. Version 6.1.02, retrieved from <http://www.praat.org/>
- Foulkes, P. & Docherty, G. (Eds.) (1999). *Urban voices*. London: Arnold.
- Lindsey, G. (2019). *English After RP: Standard British Pronunciation Today*. London: Palgrave Macmillan.
- Wells, J. C. (1982). *Accents of English* (3 vols). Cambridge: Cambridge University Press.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 三浦 弘	4. 巻 7
2. 論文標題 リバプール方言の最新の母音音価～社会階級を比較して～	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本英語音声学会中部支部学術論文集	6. 最初と最後の頁 19-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三浦 弘	4. 巻 23
2. 論文標題 マン島英語の母音～北部と南部を比較して～	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 英語音声学（日本英語音声学会）	6. 最初と最後の頁 37-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三浦 弘	4. 巻 6
2. 論文標題 アイルランド英語諸方言の母音音価	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本英語音声学会中部支部学術論文集	6. 最初と最後の頁 19-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三浦 弘	4. 巻 22
2. 論文標題 The Vowel Qualities and Lengths of the TRAP, BATH and PALM Lexical Sets in Local Accents of Cornish and Welsh English	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 英語音声学（日本英語音声学会）	6. 最初と最後の頁 17-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三浦 弘、勝田 浩令	4. 巻 10
2. 論文標題 アイルランド英語諸方言におけるR音化母音の分布特徴	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 実験音声学・言語学研究（日本実験言語学会）	6. 最初と最後の頁 30-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 三浦 弘、勝田 浩令	4. 巻 10
2. 論文標題 英語3方言の // の異音特徴	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 実験音声学・言語学研究（日本実験言語学会）	6. 最初と最後の頁 45-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 三浦 弘	4. 巻 1
2. 論文標題 イングランド北部英語における母音の諸特徴～リバプール、マン島、プレストン、ブラッドフォードを比較して～	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 実践英語音声学（日本実践英語音声学会）	6. 最初と最後の頁 19-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件（うち招待講演 1件／うち国際学会 1件）

1. 発表者名 三浦 弘
2. 発表標題 マン島英語発音の由来～現地録音音声の分析から～
3. 学会等名 日本英語音声学会 関西・中国支部 第19回研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 三浦 弘
2. 発表標題 マン島英語北部方言と南部方言の発音比較
3. 学会等名 日本英語音声学会 中部支部 第28回研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 三浦 弘
2. 発表標題 イングランド北部英語の音声～ランカシャー州プレストンとヨークシャー州ブラッドフォードを比較して～
3. 学会等名 日本英語音声学会 中部支部 第29回研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 三浦 弘
2. 発表標題 アイルランド英語ダブリン方言とキラニー方言の音声特徴
3. 学会等名 日本英語音声学会 第26回東北北海道支部研究大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 三浦 弘、勝田 浩令
2. 発表標題 アイルランド英語諸方言におけるR音化母音の特徴と分布状況
3. 学会等名 日本実験言語学会 第10回大会
4. 発表年 2017年



1. 発表者名 三浦 弘
2. 発表標題 The vowels of the TRAP, BATH and PALM lexical sets in Cornish and Welsh English
3. 学会等名 日本英語音声学会 第22回全国大会 兼 第3回国際英語音声学者大会（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 三浦 弘
2. 発表標題 リバプール方言の音声特徴 ～ジョン・レノンの南部とジェイミー・キャラガーの北部を対比して～
3. 学会等名 日本英語音声学会 第27回中部支部研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 三浦 弘
2. 発表標題 マン島英語発音の由来～現地録音音声の分析から～
3. 学会等名 日本英語音声学会 第19回関西・中国支部研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 三浦 弘
2. 発表標題 マン島英語北部方言と南部方言の発音比較
3. 学会等名 日本英語音声学会 第28回中部支部研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 三浦 弘
2. 発表標題 イングランド北部英語の音声 ~ランカシャー州プレストンとヨークシャー州ブラッドフォードを比較して~
3. 学会等名 日本英語音声学会 第29回中部支部研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 三浦 弘
2. 発表標題 マン島英語の成立と発音
3. 学会等名 英語発音・表記学会 第24回大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 三浦 弘
2. 発表標題 イングランド北部英語におけるNEAR母音とCURE母音の音素変異
3. 学会等名 日本実践英語音声学会 第3回研究大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>専修大学研究者情報システム（文学部 三浦 弘）  <a href="https://kjs.acc.senshu-u.ac.jp/sshhp/KgApp?resId=S001488">https://kjs.acc.senshu-u.ac.jp/sshhp/KgApp?resId=S001488</a></p> <p>日本実験言語学会『実験音声学・言語学研究』第10号  <a href="http://www.jels.info/REPL10.html">http://www.jels.info/REPL10.html</a></p> <p>日本実践英語音声学会『実践英語音声学』第1号  <a href="http://pepsj.org/volume01.html">http://pepsj.org/volume01.html</a></p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----